

第九講一九八二年三月十日①「パレーシアの概念化」他

ミシェル・フーコー講義集成 <11>「主体の解釈学」(2)
(コレージュ・ド・フランス講義1981-82)

ミシェル・フーコー著 廣瀬 浩司・原 和之訳 筑摩書房(2004年)

担当 ぱんこ

これまでに示してきたこと

- 古代ギリシアやローマでのアスケシスという意味での修練の役割や機能
 - 主体と真理との間に強い結合を打ち立てること
 - この結合によって、主体は自分自身の完成形態に到達したときに真実の言説を手に入れることができ、それを手元に保存し、必要な時の備えとして自分自身に対して語ることができるようになる
 - 修練は、真理を語る主体(subject of veridiction)として主体を構成するという役割を担っている
- 次に、真実の言説を伝達するための規則という技術的かつ倫理的な問題が生じる
 - =真実の言説を持っている主体と、それを受け取り生涯にわたる備えにするような主体とのコミュニケーション
 - 弟子に課されるのは、組織された沈黙である(いくつかの柔軟な規則と、注意の印を示すことも含まれる)
 - これは、沈黙・聴取・書くことの技術と倫理であり、真実の言説を主体化(subjectivation)するための訓練である
- つまり、師の立場(=真理の言説を与える者の立場)に立ったときにはじめて、真理の言説について、どのような規則・技術的手続き・倫理的原則に従って、何を語るべきか、どのように語るべきか、という問題が生じてくる
=この問題をめぐってパレーシアの概念が出てくる

パレーシアとは何か

- 一方で、道徳的資質や道徳的態度(=エーストス)に関係している
- 他方で、技術的手続やテクネーに関係する
↓
- 真実の言説を、それが必要な人に伝えるために必要不可欠
- またそれを受け取った人は、自分自身に対して主権を持ち、自分自身に自分自身の真理を語る主体として自らを構成するために、真実の言説を受け取ることが必要
- したがって、弟子が然るべき方法で、然るべきときに、然るべき条件下で真実の言説を受け取ることができるためには、師はパレーシアという一般的な形式において言説を発しなければならない
- パレーシアの語源...<すべてを語ること> “telling all”
- パレーシアの根本的な問題...率直さ(frankness)、自由、あけっぴろげ(openness)であること

- パレーシアとは、つまり、言うべきことを言いたいときに言いたいように言い、こう言うべきだと思われる形で言うことを可能にしてくれるもの
- この語は語り手の選択や決断や態度に密接に結びついているので、ラテン語では「語り手の自由」と訳す
- フランス語の翻訳では「率直な語り」という表現になる

今日のテーマ

- パレーシアという概念の研究
- パレーシアとは何か？語り手や師や指導者に要求される、道徳的態度と技術的手綱きは何なのか？
- パレーシアと対立する2つの形象と付き合させて分析する
 - 第一の敵：道徳的な敵…追従 (flattery…お世辞、へつらい、おだて、追従)
 - 追従は敵(enemy)であり、率直な語りはそれを追放し、解放されなければならない
 - 追従に対しては対立と戦闘と争い
 - 第二の敵：技術的な敵…弁論術(レトリック、修辞学)
 - 弁論術の規則から自由になることによって、本当にそれが必要な場所において、厳密に限定された形で、それも常に戦略的に定められた形で使用する必要がある
 - 弁論術に対しては自由と解放
 - 確かに敵だが、技術的パートナーではある
- これら2つの敵は互いに深く結びついている
- 弁論術の道徳的な基礎は常に追従であり、追従の特権的な道具はむろん弁論術という技術であり、それは策略ともなりうる

追従とは何か

- 追従論に関する多くの文献がある
- なぜ追従がこれほど重大な道徳的な問題となるのか
- 追従と組になっているもう一つの欠点…怒り
- 怒りについての文献も膨大にある

怒りの問題

- 怒りとは何か
 - 激しい興奮に我を忘れること、他人に対する抑制が効かないほど我を忘れること
 - 怒っている人は、他人に対して自分の権力を行使し、それを濫用することができる立場にあり、そうした権利も持っているとされる
 - 怒りの問題は、自己の支配と他者の支配、自分自身の統治と他者の統治がまさに接合する地点に位置する
 - 妻や子供や家族や奴隸に対する家父の怒り、主人が隸属平民など彼に帰属するものに向ける怒り、将軍が兵隊に、君主が家臣に向ける怒り
 - 社会における権力諸関係の配分の問題を提起しようとしていた時代(ヘレニズム初期からローマ帝国崩壊まで)の背景
 - 都市の構造は支配的ではなく、新たな形で個人の問題が生じていた
 - 権力は、個人の身分や地位の優越によるものではなく、行使すべき具体的で明確な課題を目指すような、規則を持った一つの機能になれるの

か？

→怒りの問題が提起される

- 所有権…使用権と濫用権 / 権力…使用権(濫用することなく行使する)
- 怒りの倫理とは、権力の正当な仕様とその濫用の要求とを区別するための方法のこと

追従の問題

- 怒りと正反対で補完的な問題
- 怒り…上の者がしたのものに対して行う権力の濫用
- 追従…下の者が上のものの権力の過剰さを取り込み、その恩恵や好意を勝ち取ろうとする方法
- 下の者は何によって、どのように上の者の恩恵や好意を勝ち取ることができるのか？
 - 下の者が唯一持っているもの=ロゴスによって
 - 語ることによって、下の者は上の者の過剰な権力に遡り、求めているものを手に入れることができる
 - 下の者は虚偽の言葉をふっかけることで権力を横領する
→上の者は実際の姿に満足することを妨げてしまう。適切な方法で自分自身を気遣えなくなる。
 - 上の者は下の者に対して無力な状態になる
=追従は話しかける相手を弱く盲目的にする
- 『自然研究』第四巻の序説
 - セネカが、政治権力の務めから離れて引退しようとしていたときに執筆
 - 当時シケリアのプロークーラートル(皇帝に派遣されて収税などの管理権を持つ属吏)のルキリウスに手紙を書く
 - 「私は君に全幅の信頼を寄せているし、君がプロークーラートルの仕事をしながら、適切な方法で立派に振る舞っていることも知っている」
 - プロークーラートルの仕事で立派に振る舞うとは？
 - 彼は自分の職を果たしている
 - それを立派に果たすために不可欠な、オーティウム(閑暇)とリッテラエ(学問)も忘れてはいない
→勤勉な閑暇がプロークーラートルの職を適切なやり方で果たすための保証になっている
 - 職務遂行と勤勉な閑暇によって、ルキリウスは自分の職務を保持することができる
 - 遂行する職務を、その限界内に収めるとは？
 - 自分が全体的な政治支配を使っているのではなく、単に職務を遂行していることを銘記すること
 - 「君が権力を行使するのは、職務遂行に伴う勤勉な反省のおかげである」
 - 「その際に君は、自分のことをもう1人の君主、君主の代理だとは考えていないし、君主の全権力の包括的な代理者であるとも見なしてはいない。権力を行使するのは、一つの職として、与えられて君主的な支配に自惚れることなく、職務という限界内で職を遂行することができる」

- 「なぜなら、君は君自身に満足しているのであり、自分自身を自ら満足させることができるからだ」
- 勤勉な閑暇＝自分自身についての技法
 - 目的;個人が自分自身に適合した、十分な関係を打ち立てられるようにすること
 - それによって個人は、自分や自分の主体性が、実際の職務を逸脱するような権力を持っているかのような、自惚れた妄想を持つことがない
 - 自分が行使する支配権を、全て自分自身の中に、自分自身の内部に置く。自己の自分自身との関係のうちに置く。
 - 自分自身に対して行使するこの明晰で全体的な支配権から出発してはじめて、彼は自分の任務を、与えられた職務の範囲内に收め、その中に限界付ける
=古代ローマの良き官吏
- しかし、嫌悪に苛まれている
- 自己嫌悪や過剰な自己愛のせいで、本当は気遣う必要もないような事柄に専心してしまう
- sollicitudoに苛まれている
 - sollicitudo...自己の外にあるものを懸念し気遣うこと
 - 彼は、自己愛の結果として、享楽や快樂に引き込まれたりする...自分自身を楽しませようとする
 - 自己嫌悪し、起るかもしれない出来事を絶えず心配する場合にも、逆に自己を愛し、快樂に執着してしまう場合にも、自分自身に対して完全で適当で十分な関係を持つことができない
- 自己嫌悪や過剰な自己執着によって、自分自身だけと過ごすことができないという不十分さこそ、追従者はつけこみ、追従の危険が生じる
- この非孤独、自己と完全で適当で十分な関係を打ち立てることができない状態に<他者>は介入し、いわばこの欠如を埋め、この不適合を言説で置き換え、言説で埋めてしまう
 - この言説...偽りに満ちた言説
 - 追従を言われる者は、自分自身との関係が不十分のために、追従をいう他者に依存する
 - 追従は惡意や罷に変わってしまうかもしれない
 - その人は他者に依存するばかりではなく、他者の言説の虚偽性にも依存してしまう
- 追従を言われる人の主体性、その人に特有な自己と自己との関係は、他者を通過する不十分な関係であり、他者の嘘を通過する偽りに關係

パレーシアが反追従であること

- パレーシア...反追従
 - 追従の場合と違い、その人が他者に語るとき、他者は自律的で独立的で完全かつ十分な自己との関係を構成することができる
 - 追従の目的...語りかけられる人を語る人に依存させること
 - パレーシアの目的...語りかけられる人が、ある時に他者の言説が必要としなくなってしまうこと

- 他者が真実の言説を与え、それを伝達する時にはじめて、語りかけられた人はそれを内化し、それを主体化することができ、他者との関係なしですますことができる
- パレーシアにおいて伝達される心理は、言葉を受け取った他者の自立性を確認し、保証してくれる

指導者と被指導者の関係

- プラトンの時代…その追従の本質は恋するものが少年に対して行うもの
- ヘレニズム・ローマ期…社会的・政治的な追従が問題になっている
- 追従を支えるものが、性的欲望ではなく、ある他者に対して劣位の立場にあるということ
- 指導者は、真理を備えた老人が若者に声をかけるのではなく、彼が話しかける相手に対して社会的に劣った立場にいる者のこと
=金で雇われたもの、金をもらう人
- 人は彼を常駐の忠告者として家に呼ぶ…いかに振る舞えば良いかを相談する相手
=雇われ人が主人に対して持つ関係
- ガレノスの指摘「指導されるものは指導者よりもあまり豊かで強大でないようにしなければならない」
- ここにより一般的な政治の問題が絡んでいる
 - 帝政…君主の知恵、その美德、道徳的資質が重要
 - 誰が君主に忠告するのか？…君主に対する真理の問題
 - 皇帝の君主ではなく、人間として何であるのかを語るのか？

パレーシアと弁論術

第一の違い;由来

<弁論術の場合>

弁論術=話しかけられた人を説得する術

…真理についての場合もあれば、嘘や非真理についての説得もある

→クインティアリヌスの分析

- 弁論術は、真であることだけでなく、真でないことも聴衆に説得するような術である
- 虚偽に基づいたテクニーは、真のテクニーでもなく、効率的でもない
- 良き指揮官は、虚偽をも説得できなければならない（「敵は本気ではないので恐れなくて良い」など）
- 語るもののが知り、支配している真理に向けることはできても、語られた内容に関して、また語られる人に関しては、真理に向けられていない
- よって弁論術は虚偽を含みうる

<パレーシアの場合>

- 真理しかありえない
- 真理がないところに率直な語りもありえない
- パレーシアとは、真理そのもののいわば直接的な伝達
- パレーシアはパラドシスを最も直接的に保証する
 - パラドシス；真実の言説が、それをすでに所有しているものからそれを受けるものへと伝達されること
- 受け手はそれを吸収して利用し、主体化できなくてはならない
- パレーシアとはこの伝達の道具であり、真実の言説を一つの粉飾もなしに、剥き出しの形で作動させることだけを目的としている

第二の違い; 形式を規定するもの

<弁論術の場合>

弁論術…規則立った手続きによって組織されている

- 教えられるべき術でもある
- キケロやクインティアリヌスの見解…弁論術の規則を規定するものは、論じられる主題
- どのように語るべきかをいう時に関与してくるのは、語られる事柄

<パレーシアの場合>

- 一般的に、パレーシアは術ではない
- 特徴として、内容そのもの(=与えられた真理)に規定されない
- パレーシアの条件…慎重さの規則、熟練の規則
- この条件のもと、それを受け取ることができるような個人に対してのみ、真理を語りかける
- パレーシアの本質を規定しているもの…カイロス(機会)
 - 機会…諸個人がお互いに作り上げる状況のこと。真理を語るために選ぶべき瞬間。
 - 誰に話しかけるのか、どの瞬間に話しかけるのかに基づいて、その言説が語られる形式に影響が出る
- クインティアリヌスの例
 - 一刻も早く、生徒を弁論術の教師に委ねなければならないという
 - 弁論の教師の2つの役割
 - 弁論術を教えること
 - 道徳的な役割…個人自身の形成を助けること、自己と自己の適切な関係の構成を助けること
 - 与えるべきは経験的な忠告(≒パレーシア)
 - 生徒にあまり厳しくて敵意を抱かれてはならない
 - 甘やかしすぎて傲慢な態度を取らせてもいけない
 - 処罰より、忠告を与える方が良い
 - 質問に快く答えるべきであり、黙って質問しない者には問い合わせあげるべきだ
 - 1日に何度か師も言葉をはっし、聴衆が彼の発言を「持ち帰る」ようにすべき

第三の違い; 目的と役割

<弁論術の場合>

弁論術の本質的な役割…他者に働きかけること

→集会の決定を方向づけたり、方向転換させたりすること、民衆を導いたり軍を指揮したりすること

- 最も大きな利益を得るのは語っているその人
- 彼は栄光を手にいれ、それは死後も続く

<パレーシアの場合>

話し手と聞き手の役割がまったく違う

- 他者を支配するのではなく、他者を指揮したり何かをするように仕向けたりする
- 目的…他者が自分自身に対して、また自分自身との関係において、主権の関係を打ち立てること

- この絶対的な支配権こそが、賢い主体、得のある主体、この世で到達できる最高の幸福に達する主体を特徴づける
- パレーシアを実践する人(師)は、直接的でし的な利害関心を持つことはない
- パレーシアの行使は、本質的に寛容によって支配されなければならない
- 他者に対する寛容こそが、パレーシアの道徳的義務の核心

パレーシアと弁論術の特殊な関係性

- 弁論術の構造や働き方(ゲーム)においては、パレーシアと弁論術は全く異なる
- 一方で、ある成果をあげるために、パレーシアの戦術そのものにおいて弁論術の要素や手続きに頼らざるをえないこともある
- パレーシアは根本的に弁論術の規則から解放されており、必要が生じた時のみ、それを迂回的に取り上げて利用する
 - 例)古代の文化における、弁論術と哲学の根本的な闘争

パレーシアの肯定的な定義づけの分析

- 第一の文献 フィロデモス『パレーシアについて』
- 第二の文献 セネカのルキリウス宛書簡第七五
- 第三の文献 ガレノス『情念論』

フィロデモスの文献『パレーシアについて』

- ジガンテの論文の注釈を参照
 - フィロデモスはパレーシアをテクネーとして提示している
 - 「賢人や哲学者は蓋然的で厳密的でない議論で推定することによって考へるが故に、率直な語り(パレーシア)を行っている」
 - 推定の術vs方法の術
 - 推定の術(Conjectural art)
 - 単に本当らしくて蓋然的な議論によって勧められるもの
 - たんに並置されるような議論の連鎖によって、本当らしい真理に到達しようとしてしまいかねない
 - 方法の術(Methodical art)
 - 確固とした確実な真理の結果として到達することを含意
 - 道は一つしかない
- フィロデモスの文章によれば、推定的理性はカイロス(機会)の重視に基づく
 - アリストテレスにとっても、推定的な術はカイロスの重視に基づく
 - 弟子に話しかける機会はできるだけ遅らせなければならないが、遅らせすぎてもいけない。良い機会を選ぶべき。
 - 聞き手の精神状態にも考慮しなければならない。叱責するなら、場の明るさと陽気さを失わないようにしなければならない。
 - 機会を掴むということにおいて、医術や航海の実践とパレーシアは類似する
- 哲学的なパレーシアと医学的なパレーシアを平行させる
 - パレーシアとは補助であり、治療術である
 - パレーシアとは、然るべきやり方で治療することを可能にするべきもの
- 「率直な語り(パレーシア)によって、生徒たちは自由に語り、互いに互いの厚意を引き起こし、強めあい、活性化することができるようにならぬか」
- パレーシアが反対に傾く運動

- パレーシアは師が弟子に何かをさせ、何かを「強化」、活性化しようとする
- それは生徒が互いに対してもつ厚意であり、それは自由に語ることによって可能になる
- 生徒たちも自由に語らなければならず、こうして互いに対する厚意が確かなものとなり増大する
- 師のパレーシアの弟子自身のパレーシアへの移行の徵候
- 師が自由に語るという実践は、弟子たちをそそのかし、その支えや機会になるもので、それにより弟子たちも自由に語る可能性や権利や義務を得る
- 弟子たちの自由な言葉が友愛を増大させる

- 師から弟子へのパレーシアの移転
- 弟子たちの相互の友愛の重要性、弟子たちは助け合わなければならない

パレーシアにおける二重の組織

＜垂直的な系譜＞

- エピクロス派のグループでは、指導者の地位は大きく、中心的
- 指導者が相続に基づくため(人から人への相続)
→生きた模範の伝達や人的な接触によってエピクロスまで直接に遡ることができることが不可欠
- 師の立場を特徴づけていたのは、エピクロス以来伝えられてきた生きた模範が与える権威に基づいて、語ることができること
- 彼は真理を語る=間接的に結びついている師の真理

＜水平的な系列＞

- 友愛の関係、相互扶助

エピクロス派における告白の実践

- 弟子たちは師の前に集まり、告白の実践を行う
- 告白…言語的で、明示的で、規則に基づいた発達した実践。
 - 弟子は師の真理のパレーシアに対して、ある種のパレーシア、すなわち心の開けによって応答する
 - 弟子は自分の魂を開き、他者とそれを通じ合わせる
 - こうして自分を救うために必要なことをする時、他者に対しても拒否や排除や非難の態度ではなく、厚意(エウノイア)の態度を引き起こすことができる
- 自己に真理を教え、自己を救うことができるような真理の言葉に対する義務
- 私は真理の言説に対して応答しなければならず、また応答するようにそそのかされ、求められ、余儀なくされる
- 私は真理の言説によってそれに応答し、他者たちに私自身の魂の真理を開かなければならない

＜コメント＞

- パレーシアが師の語り手の技術であったことが明確にわかった。弟子の沈黙が必要であるということ、パレーシアが語る技法であるというところで整理できそうだと思った。

- また師弟関係であることが、非常に教育的な議論であると考え、興味深かった。一方で、この議論は師弟関係及びそこから派生する弟子たちでの関係以外は含まれていない議論、という認識でっているか？逆に、社会での人との関係の多くはこの師弟関係の派生とも取れるのだろうか？この議論の範囲が気になった。
- また、師と弟子は誰がどういう状況でそれぞれに当てはまるのか？セネカはルキリウス師だろうが、中身はルキリウスが誰かの師であることについての内容のようにも読めた。
- 追従者…様々な物語にいる、満たされなかつたり不幸な悪い王様の隣にいる最も悪い家臣を思い出す。ルキリウスの例では、追従される者について論じてあり、追従される者のすき（非孤独）の問題であるという視点が興味深い。追従するなというより、追従されるな、という視点と捉えることもできた。
- この議論を参考すると、自立するとは、自己と真っ当な自己の関係を打ち立て、非孤独でも生きていけることと捉えられる師を目指すことと読んだ。
- 弟子をなんとなく師弟の一対一の関係のように捉えていたが、弟子が複数いるという視点が新しく感じた。コミュニティとしての議論だったことに気がつかされた。
- これまで師弟が固定された議論だったように思ったが、今回の議論によって、師の真理に基づく、社会的な知の再生産とその社会における実践とも言えるようなものを読み取った。またその起点が靈性という言葉で表され、自己と自己の関係に始まるという風に整理してみた。